

博物館への期待

白木江都子（特定非営利活動法人大阪自然史センター 理事）

大阪府貝塚市にある小さな博物館「貝塚市立自然遊学館」を昨年退職し、土曜日だけ出勤しています。主な仕事は、任意団体「自然遊学館わくわくクラブ」のメンバーとともにクラブを育てることと、今から13年前にボランティアの手でつくった自然生態園を、限りなく貝塚の自然に近づけることです。肩書きに書いたNPO法人大阪自然史センター理事としては、センターが指定管理事業を受託した高槻市「芥川緑地資料館」の運営に関わっています。仕事というよりはボランティアに近いその二つの立場を生活の中心に置いていますので、その立場から共生の広場に参加させていただき、発表を聞かせていただきました。



発表の内容に①連携②専門性③地域の自然④継続のいずれかが含まれていると、心地よく共感し、発表者はどのような経緯で発表することになったのかに、とても興味を持ちました。

発表に至るまでに、何らかの形でひとはくが絡んでいるのは間違いないと思いますが、その絡み方こそが、ひとはくの姿勢・特徴・個性であるに違いありません。中瀬副館長が開会挨拶で「館の内部に向かっての行動、館の外部に向かっての行動」と話されたのは、そのようなことも含んでいるのだろうと推察しました。

学校では、熱心な先生が熱い思いで子どもたちを引っばって行く、子どもたちもそれに応えて活動し、関心が高まり活動人数が増え、担当の先生だけでは子どもたちの熱心さや探求心に応じきれず、博物館に応援を求めることになっただろうし、学校を支援していたNPOや地域の人たちも、博物館で学習する必要を感じ、相談したいことが出てきたことでしょう。「ムコのビオトープづくり活動」における外来種問題などは、連携が生まれ活動が広がったけれど、余りに深く大きい難題に出くわし、立ち往生する様がかえって好ましく、「ここからが出発点、みんな考えて行こう」という結末になったことに安堵しました。

博物館が実施するセミナーがきっかけで、対象の生きものに改めて興味を持ち、もっと知りたいという思いが湧き、観察会が終了しても観察し続けたい仲間が集まり、博物館もその集まりを応援し、繋がりを大切にしながらも自主的に動いて行くように仕向ける、そのような例が「ほたる幼虫上陸セミナー」でした。

セミナー参加者の中から「より深く追求したい、専門性を高めたいと願う人」を見つける眼力を持ち、「その人や団体に研究を続けさせる」指導者が、ひとはくには何人も居られるようです。「ミスジナガハグサとナガハグサの相違点」「安室川の淡水産紅藻チスジノリを復活させる試み」の発表を聞いていると、（たとえ相手が中学生であっても）もっと学習し研究したくなるように仕向ける指導者の存在、生徒と指導者のいい関係を羨ましく思いました。

「昆陽池の水生物相について」伊丹市みどり公園課が、業者ではなく伊丹北高校へ依頼した出発点、それを伊丹市立北中学校や南中学校の生徒と合同調査に発展させたこと、ひとはく地域研究員が生物調査の指導に当たったこと、連携の構図が理想的です。

手を貸して欲しいと依頼されたとき、博物館はどう対処するか、私自身もいろいろな場合を

経験しましたが、まず話を聞く耳を持ち、乗り出そうとしている人や館もあれば、応じきれない、時間が取れないなどの理由で、館の他の使命を優先するところもあるようです。あらためて博物館館の使命について考えさせられます。

ポスターセッションでは「とりあえず、自分にできることから始めてみました」というようなスタンスの発表が心に残りました。「続・花粉を観る」などがそうです。

私の属する自然遊学館わくわくクラブは4～5年前からハッサク果樹園の収穫手伝いを始め、最近では剪定・摘果・選果・販売などにも関わるようになり、果樹園で堆肥づくりも始めています。自分が『援農』に力を入れているので、「農産物直売所のススメ」は、発表者との会話がはずみました。科学志向から、農業を考え農業を支える方向に進む団体がもっと増えればいいな、と希います。

地域の身近な自然、地元の人もあまり登ることのない静かな山の小さな谷に数年通い、ひっそり暮らす生きものたちの観察をつづけておられる「古寺山の小さな谷の生きもの」にも心惹かれました。通われているうちに、いきものについてもっと知るために、兵庫県立大学へ社会人入学を果たされ、仲間も増え、「古寺山くらぶ」が結成されたと聞くと、しみじみうれしい内容でした。

生きもの好き（植物を含めて）が世の中にもっともっと増えたら世の中は変わる、と思っています。そのために何か動いているかと問われたら余りに微力、余りに心細い限りですが、博物館の関係者が本気になって動き始めたら、世の中が変わるのではないのでしょうか。

共生の広場での発表を聞きながら、どの部分でどのように博物館が絡んでいるのだろうと想像するのは楽しかったし、ひとはくは、個人よりもある程度まとまった単位の生きもの好き集団を増殖することに熱心だと感じました。大きい博物館は、生きもの好きの集団を増やすことができるのだと気づき、その点で、他の博物館館に刺激を与え続けて欲しいと思いました。

小さい館の諸事情は厳しいけれど、「個人レベルでのささやかな生きもの繋がり、小さい博物館にまかせてください」と言いたいなあ…。